

『中日大辞典』の編纂 ②

今泉潤太郎

(承前)

辞典の改訂 中日大辞典編集者の鈴木・内山・今泉三氏は辞典改訂の必要性についての認識では一致してはいたが、改訂編集の開始に対してはおのおのの態度を持っていた。一九七三(昭和四十八)年の、南開大学等三大学における辞典座談会の開催がきっかけとなり、七五年四月、『中日大辞典』の前面改訂をめざし辞典編纂処が七年ぶりに開設される運びとなった。辞典編集者の改訂への熱意に火が着いたことは、辞典座談会がもたらした最大の成果の一つだといえよう。鈴木教授は七四年に胃切除の手術後、教授の職を辞し改訂版の編集に専念する決意を披瀝した。三氏は協議を重ねた結果、改訂を始めることに決した。しかし、内山教授は健康上の理由により不参加となった(同年八月逝去)。

改訂版の編集開始決定に更に拍車をかけたのが『現代漢語詞典』の刊行であったことはまちがいない。一九七三年中国国内でのみ発行されたこの辞典(試印本と試用本)は、中国社会科学院語言研究所の呂叔湘・丁声樹両氏を主編者として一九五八年から編集が始められてきたもので、正式の出版は文化大革命も終熄した一九七八年になってからである。この辞典は中国における初の本格的現代語辞典といふべきものであり、『中日大辞典』をこれと対照して全面的に見直す必要が生じたのである。

改訂に当たっては編集の大綱を変える必要はなく、文化大革命などによる変化が語彙面に及ぼした影響を正しく紙面に反映させることや、『現代漢語詞典』との対照、新しい語彙の採録、用例の充実などに改訂の重点を置くこととした。紙面上の大きな変化は漢字偏旁簡化を全面的に採り入れ、辞典に使用する全ての漢字を規範化することとしたこと等である。これらにともない、一定程度の増ページは避けられないこと、新活字の作成は費用と時間がかかることなどが明らかとなり、改訂計画の策定も簡単にはいかなかった。

こうした辞典関係者間の話し合いをふまえ、改訂版出版のための辞典刊行会が招集され、審議の結果、基本骨子が了承され、大学評議会に提案された。最重要課題の経費問題は、この時点ですでに初刷一萬部、七一年四月第二刷六千部、七三年三月第三刷三千部、七四年二月第四刷七千部、合計二万六千部が増刷され、これらの収入は大学当局の貸付金を返済してもなお改訂版出版経費の捻出が可能となる額であり、さらに今後の販売収入も見込まれることなどから初刷印刷時の状況とは一変し、評議会において、改訂版編纂が異議なく承認されたのである。なお初版本はこの後、七八年十月第五刷七千部、

八〇年四月第六刷八千部、八二年九月第八刷六千部と増刷を重ねた結果、出版総冊数は五万五千部となり、改訂版に引きつがれていった。なお、販売価格は当初三〇〇〇円であったが、最終の第八刷は四八〇〇円となっていた。編纂実務上には経費上の問題に比し、大きな問題が累積されていた。六年前に華日辞典編纂処を解散したため、新たに辞典編纂のための場所を確保しなければならなかったし、最低必要とされる図書資料・各種器材も再び整えなければならなかった。以前使用していた大型カードボックスは大学自動車部へ払い下げられて工具入れとして利用されていたが、再度辞典編纂用に復活した。図書館側に寄贈した旧辞典室蔵書中の多数の参考書を長期借り出すことの了解を得られたなど、再開への段取りも整い、一九七五年四月、大学評議会において正式に中日大辞典編纂処の再設置が決定された。新しい辞典編纂処は当時の本館（現 記念館）西北角の一隅にきまった。

改訂版編纂の作業は基本的に初版時と同じく、中国語専任教員が講義のない時間を編集にあてることとした。改訂版編集委員長は今泉潤太郎教授、編集委員に黄異・陶山信男両教授、および荒川清秀・森博達両講師をあて、辞典編集専従者として鈴木揮郎氏に編集主任を委嘱し、編集委員会が発足した（以上、肩書はいずれも発足時）。編集委員はのち高臨渡教授や、白井啓介講師らが加わったりし、出入りもあった。

改訂版の原稿作成は初版最新刷の清刷を本稿とし、各ページに増補訂正を朱で書き入れる方式によった。これは内容の増減が一目でわかる利点がある反面、全ページが朱で一杯となり紙を貼り足して記入するなど原稿が乱雑となったりし、多少の混乱をもたらした。

編集作業が進むなかで一九七七年、中国は文化大革命を終息させたのち方向を大きく切り変え、八〇年代に入ると「改革開放」をスローガンにあらゆる分野で著しい変化発展をとげ、その成果も目に見えてきた。一九八三年改訂版原稿の脱稿までの間に、言語面の成果のうち編集に直接関係する重要な文献としては、七七年計量単位名称統一、八〇年第二次漢字簡化方案草案所載の二四八字の廃止、八一年国家標準（GB）コード制定、八三年漢字統一部首表草案などがつきつきと発表された。また辞典など参考書類に至ってはさまざまなものが続々と出版された。なかでも戦前から有名な『辞源』と『辞海』はそれぞれ一九七九年に修訂本を出し、編集上大いに参照する所があった。前述したとおり、『現代漢語詞典』は一九七八年に出版され、改訂版編集の上で最も参考としたものである。言語以外の各分野における参考書の出版も活発となり、また出版物は直接中国から取り寄せられることも可能となり、初版編集時と異なり、いわば資料が氾濫する中で、いかに編集上必要な情報を選択するかが必要な時代となったのである。

一九八一年、本学は中国との学術交流を本格的に進め、まず南開大学・北京語言学院と学術交流協定を締結した。特に北京語言学院からは、毎年交換教員が派遣され、劉青然氏・諸在明氏らをはじめ赴任した中国人教員が辞典編集に協力する体制もできた。その他、北京農業機械化学院黄志明教授は二年間にわたりその専門分野で編集に協力され

た。

学内ではとくに池上貞一教授・中山欽司氏ら、学外では大林洋五氏、もと東亜同文書院中国語教員の岩尾正利氏・木田彌三旺氏、また浜田国貞氏らから協力を得た。名古屋市立大学稲垣勲教授から専門知識（葉学）を余すところなく提供をうけた。¹

こうして改訂版編集が軌道にのり、辞典編纂処では十年一日の如く原稿相手に果てしない作業が続けられている中での一九八二年一月、辞典編集に生涯をかけ、余人をもっては替えがたい鈴木擇郎氏が逝去したことは一大痛恨事であった。

改訂版編集に一応のめどがついたのは一九八四年に入ってからであった。

編集の進捗に平行して印刷の問題も検討された。経費の中で印刷費は依然として最大の問題であった。初版では約三〇〇〇の簡化活字の新鑄にとどまったが、今回は一九六四年に発表された印刷通用漢字字形表所載の六千二百余字を全て使用し、さらにこの字形表にない漢字でも偏旁簡化すべきものは簡化した。すなわち辞典に使用する漢字は例外なく規範化された字形とする画期的なものであった。この活字新鑄費用は単純計算によっても初版のその二倍以上になるため、印刷費の総額は巨額なものと予想された。印刷は初版の印刷を担当した図書印刷㈱と、大日本印刷㈱・凸版印刷㈱の大手三社の競争見積りの結果、凸版印刷と決定した。同社の開発したCTS（コンピュータ使用印刷）による本格的な中国語印刷となるため、活字新鑄費は同社の全額負担とすることになり、印刷費を最小限に押え込むことができたのである。またCTS印刷は漢字索引・日本語索引などの作成に威力を発揮することも期待された。

印刷とともに出版のことも懸案であった。初版と同様に増訂版も自費出版行なうことは大方の了解事項となっていたものの、出版社については刊行会内部で長い間議論されていた。初版の出版は当初のいきさつから憐大安に全面的に依託していた。しかし同社は主として自社の店頭販売およびダイレクトメール販売に頼る小売店であり、出版社ではなかった。通常の取次ルートにより注文する全国の書店からすれば、客からの注文があっても『中日大辞典』の版元がどこであるか分らず、また大手取次店でも扱っていないため、辞典を入手する手段がないと思うのも無理からぬことであった。したがって個人や書店から大学（内の辞典刊行会）へ直接注文が入ることもしばしばで、この点の改善は最大の課題であった。

一九六九（昭和四十四）年九月、当時の複雑な日中関係を背景とした騒動にまきこまれた大安は自己破産し、事業閉鎖してしまったが、七一年に入って、同社社長であった小林実弥氏は憐燎原を新たに設立した。これ以降、燎原が大安を引きついで『中日大辞典』の発売元となり、引きつづき第二刷からの印刷にも関わることとなった。

燎原に引きつがれてからは辞典刊行会からの要望もいれ、販売面は一定の改善は図られたものの、読者が一般の書店の店頭で辞典を手にとって見ることができない難点は依然として解消されなかった。辞典刊行会からも直接、大手取次ぎ店へ働きかけを行なったが効果はあがらなかった。当時、最新・最大・最高の中国語辞典として評価が高まる

につれて、愛知大学『中日大辞典』が全国各地の有力書店に配架されることから生じる宣伝効果を強く期待する学内外関係者の不満は大きく、無視できないものとなっていた。従って改訂版に際して出版社をどこにするかという問題は、以上のような課題を抱えて辞典刊行会内部では長い間話し合われてきたが、印刷に入る段階で最終的に結論を出すこととなった。辞典刊行会はついに、大安・燎原と当初より一貫して『中日大辞典』出版に尽力された小林実弥氏の労に対して深謝するも、前記の課題解決が絶対の条件となり、増訂版は大手出版社に委ねることと決定し、ここに改めて出版社の選考と交渉がはじまった。その結果、『諸橋大漢和辞典』出版の実績をもつ懶大修館書店と決定した。

なおこの間、『中日大辞典』の刊行が大学補助活動事業と位置づけられたため、一九八一年四月に中日大辞典刊行会の経理は大学事務局内へ移し、辞典編集処事務は庶務課扱いとなるなどしたが、その後の学内諸制度の改革にともない、刊行会は事実上活動を停止され、のち九三（平成五）年に至って解散した。

改訂版の印刷・校正には三年を要した。C T S印刷は漢字索引や日本語索引などに十分威力を発揮したが、従来の校正ゲラと全く異なる形で打ち出された初校ゲラには、習熟するまではまごつくことも多々あった。初版時と同じく改訂版の場合にも本学学生の協力があり、校正の追いこみの段階では多数の学生が一斉に点検作業する場面もあった。

一九八六（昭和六十二年）二月、改訂新版の編集開始後十二年にして『中日大辞典 増訂版』が誕生した。増訂版は本文二五二〇ページ・漢字索引一〇四ページ・日本語索引九三ページ・総頁数二七六五ページ。初版本に比べ約七〇〇ページの増である。

親字は一万三一六六字（簡化字八八一二字・繁体字二七五九字・異体字一五九五字）で、初版に比し二四〇〇字余り増えた。収録単語数は約十四万三〇〇〇語で、初版に比べ二万数千語増となった。日本語索引の日本語は約一万九〇〇〇語で、初版に比べ約一〇〇〇語増である。増訂版の最大の特徴は、辞典本文すべてにわたって規範化された簡化字を使用したことであった。これは簡化字総表・印刷通用漢字字形表に載っていない漢字でも、すべて簡化したものを使用した画期的なものであった。

表紙は初版本の黒に近い紺色から、あざやかな赤色に変った。版型は初版本と同じB6版のため、初版本の二倍近い厚さとなり、ビニール素材の表紙が束を支えきれず割れたりはがれたりして、製本技術上おおいに苦勞させられた。初版に比べ印刷費をはじめ全ての経費が高騰して、これを販売価格に一定程度反映せざるをえなかったが、辞典刊行の主旨に照らしてできる限り押さえ、八六〇〇円と決められた。この定価はその後も変更されず現在に至っている。この年の初め三大全国紙に一斉に『中日大辞典 増訂版』発売の予告広告が掲載された。増訂版初版は一万七千部と大目に印刷した。初版本の『最新・最大・最高』の中国語辞典として確立した評価を再びかつ一層たしかなものにした増訂版が、大手出版社である大修館書店によって三、四月の開学期に全国一斉に発売されるや、好評裡に売行きをのばしていったことは、関係者にとって何よりの喜びであった。本学関係者が待ち望んでいた、全国の有名書店で、愛知大学中日大辞典編集処編

『中日大辞典』の文字を見ることが実現したのである。

一九八六年五月三十一日、名古屋都ホテルにおいて『中日大辞典増訂版』出版記念会が、中国国家教育委員会への一千冊贈呈式を兼ねて開催された。濱田稔学長の挨拶に始まり、今泉潤太郎編集委員長から編纂経過の報告がなされた。文部大臣（代読）はじめ各界の代表から祝辞がよせられ、中国からは孫平化中国日本友好協会会長・滕維藻南開大学学長から祝電が披露された。来賓を代表し駐日中国大使代理の陳彬参事官から、一千冊贈呈に対する謝辞と出版の祝辞が述べられた。ひきつづき、愛知大学で中国語を学んだ卒業生の会主催の記念講演会・出版記念祝賀会が盛大に行なわれた。

なお、これに先立ち学長と今泉教授は、折から来日中だった何東昌中国国家教育委員会主任と東京の中国大使館において会見し、『中日大辞典』の贈呈を申し入れた。何主任は感謝の意を表すとともに辞典を全国の大学・高等教育機関へ配布し活用させたい旨を表した。

増訂第二版の製作 増訂版の製本も完了し納品の日も近づいた一九八五年十月、人民日報に簡化字総表が再掲載されたが、これに附された国家語言文字工作委员会による説明文で、七字の漢字の字形訂正がなされていた。追いかけるように同年十二月、国家教育委員会・国家語言文字工作委员会・廣播電視部の連名で「普通話異読詞審音表に関する通知」が発表され、五十三の漢字の字形と字音の訂正がなされた。最新・最大・最高の内容を目指し努力を積みかさね、やとと発売を目前にした今、わずか六十字についての訂正が完璧を期してきた編集スタッフに与えた衝撃は、まさに青天の霹靂ともいうべきものであった。

この六十字が約二五〇〇ページの本文中に使用されている場所を漏れなく捕捉し象嵌・修正することは、あらためてCTSによる製版以外にはない。製版は莫大な費用を要するが、ただ六十字以外は何ら問題ないので、この費用は通常の増刷費の五割程度増と見込まれた。辞典編纂処は直ちにこの訂正を入れた増訂第二版の作製準備を進めた。増訂版初刷り一万七千部は、一九八六年四月の発売以来まさに飛ぶような売行きを示した。大修館書店発行になってから流通上の隘路も打開され、全国の書店に配架されて読者が同書を手にとって見ることができるようになったばかりか、新聞広告などで書名が広く知られることにより初版以来の評価をさらに不動のものとし、さらには愛知大学の宣伝にも役立つこととなった。某紙日曜版の読者投稿欄に「中日びいきの祖父が大の巨人フアンの孫から、ドラゴンズを詳しく紹介した本がでたからと言われて本屋にいつて探したがみつからない、ハハーン、これだなと気づいたが後の祭り、正体は『中日大辞典』だった」云々と載ったように、一般の話題となるくらいであった。

年末には残部も三千冊を切り、翌年の増刷をどうするかが出版社と話し合われた。増刷するならばどうしても改版して、漢字六十字分の訂正を盛りこみ、中国を含め世界でも初めて発行される辞典としたいとの編集者の熱い思いが、増刷を増訂第二版として改版することを辞典刊行会に決定させた。ただこの決定に対して大学評議会から、刊行会

の決議のみで処理したという手続上の瑕疵及び、通常の五割増という経費上の問題の二点を追及された。評議会では再三の継続審議でなかなか了承にいたらず、関係者はひたすら真意を訴えてようやく承認された。

また、増訂第二版には付録に「異読詞審音表による修訂音一覽」をつけ加えるとともに、増訂版既購入者の要求に応じてこの表を提供する措置をとった。このような次第で翌一九八七（昭和六十二）年、増訂第二版として六十字の修正を盛りこんで一万部が増刷された。これが現行版として現在まで引きつづき発行されてきているものである。またこの年は大修館書店創業七十周年と重なったため、同社はこれを記念して中日大辞典増訂版の特装大型限定本（特価二万八〇〇〇円）を出版した。

増訂第二版について章曙駐日中国大使は推薦の辞をよせ、

愛知大学編纂の『中日大辞典』は語彙が豊富で大変使いやすく、中国研究者の良き師、良き友でありました。この度、中国の最新資料にもとづき全面的に修訂され出版されたことに心からお祝いの意を表します。

と述べた。

大学の協定校である北京語言学院の呂必松学長は、

『中日大辞典』は中国人が日本語を学ぶうえで、また日本人が中国語を学ぶうえで重要な役割を果たし、大きな貢献をなしてまいりました。改訂後の『中日大辞典』はより一層大きな役割を果たし、より大きな貢献をすることでしょう。

と期待感を表した。

増訂第二版はその後一万部ずつ、八七年二月第一刷、八八年九月第二刷、八九年一月第三刷、九二年四月第四刷、九四年六月第五刷、九六年八月第六刷の、計六万部発行されている（その後、九九年に一万部発行）。

国外における『中日大辞典』 『中日大辞典』の出版の発端は、中国人民に対する中国の友好を原点としているといえる。東亜同文書院大学の辞典カードの返還がなかったら、愛知大学の『中日大辞典』は誕生しなかったのである。この日中友好の精神を基礎として編纂されたとの認識は本学と中国側に共有されており、編纂の過程で示された激励や配慮のみならず、本学の教育事業に対して一貫して示された対応からも中国側の好意が読みとれる。

したがって辞典刊行会は、辞典完成の暁にはこれを中国に寄贈し感謝を表すとともに、日本語を学ぶ上で役立ててもらおうとの考えをもっていた。特に初版時の印刷費捻出の手段にした辞典の贈呈は、その後も本学の変わらぬ方針として行なわれ、現在までに次のとおり中国側へ贈られている。

一九六八（昭和四十三）年初版出版時に中国日本友好協会へ千二百冊、八六年増訂版出版時、本学創立四十周年を記念して中国国家教育委員会へ一千冊、駐日中国大使館へ百冊、八七年増訂第二版出版時に中国国家経済委員会へ一千冊、九四（平成六）年に原稿カード返還四十周年を記念して中国日本友好協会に一千冊、駐日中国大使館へ五百冊とまとまった数量を贈呈した。これらはすべてそれぞれ中国の関係下部機関へ配布され友好に利用されている。

一九七三年、南開大学等における『中日大辞典』に関する座談会のため訪中した愛知大学学術代表団のメンバーが、たまたま上海でバスに乗り合わせた中年婦人が『中日大辞典』を手にかけているのを見て尋ねたところ、彼女は上海市政府の幹部で、仕事上中国日本友好協会から上海市教育局に配布されたこの辞典を使用し大変役立っているとの報告がなされている。文化大革命のさなかにおいても本学の期待したとおり、全国の関係機関に辞典は配布されていたのが確認されているのである。八七年の贈呈に際しては中国国家教育委員会からの礼状に

对于贵方的友谊情谊，我们深表感谢。如同所期望那样，我们即将这些辞典转发下去，同时转达贵方的友好之情，相信这一千册辞典将在中日友好及中日人才交流事业中得到充分利用（…）。

と述べられているのも言葉どおりに理解してよいであろう。

中国に贈呈された総計六〇〇冊余の『中日大辞典』は大海の一滴ともいふべきものではあるが、小にしていえば愛知大学の名を中国において高らしめたのみならず、大にしていえば「日中友好の船、文化交流の橋」となっているのである。中国への辞典贈呈は『中日大辞典』出版の原点から出るものであり、それを常に再確認するものである。

他方、中国国内での『中日大辞典』の売れゆきは微々たるものであった。なかには直接愛知大学宛てに辞典がぜひ欲しいと直訴してくる中国人もあった。中国では近年まで海外の重要な著書は「内部発行」であった。『中日大辞典』もこの例にもれず初版・増訂版ともいわれる「海賊版」が相当流通していたもようである。香港では一九七九年頃二、三の出版社から引き合いが入り、結局、榊大安と取引実績のあった香港三聯書店との間で契約ができ、現地の新聞広告も出されて、一二〇〇香港ドルで売りだされた。シンガポールへは香港から出ていったもようである。台湾においては辞典の簡化字を全て繁体字にかえ、発音表記と配列を（中国の）ピンインから（台湾の）注音字母にかえ、さらに本文中の見出語・釈語用例などの中、台湾では不都合な部分（ほとんど政治関係に属するもの）だけ除いた『中日大辞典』の剽窃本が『新編中日大辞典』の名で新台湾ドル五五〇円で発売された。韓国で出版された中韓辞典には『中日大辞典』を無断で最大限利用しているものがあるが、八三年ソウルブックフェアへの出展を機に、韓国出版社との間で韓国語出版契約が正式に結ばれた。

欧米へは、初版・増訂版の出版を記念して、アジア研究で著名な二〇余の大学図書館へ『中日大辞典』を贈呈した。特に一九七一年、ハンブルク大学アジア研究所の紀要に紹介され、また七六年『ブックレビューズ』上に紹介されたこともあってか、欧米の書店からの注文もあった。オーストラリアの大学図書館からは直接本学へ受贈の申入れもあった。

日中友好の船、文化交流の橋 「それは数奇をきわめた辞典であった。はじめ中国は上海の同文書院に呱呱の声をあげ、十数年にして終戦とともに中国に接収された。書院の教授たちは、おそらく永久に日の目をみないものとおもわれたにちがいない。戦後十年にちかく、その膨大な資料が中国から返還された。そだての親たちのうれしきは想像にあまりある。それよりさらに十年、日本は豊橋の愛知大学で根本的な検討と整理がくわえられ、いまようやく刊行されようとしている。それは実に、日中両国人の心血がそがれていた。(…)

おもえば、この辞典は、かつて日中両国のあいだに介在して数奇の運命をたどったが、それはやがて両国文化交流の使節たる資格を賦与される所以となった。前後三十余年にわたる編集各位の努力にたいし、ここからなる敬意をささげたいとおもう。」

これは、初版出版時、「日中交流の使節」と題する倉石武四郎東京大学名誉教授の推薦の言葉である。また増訂版出版時には、駐日中国大使館の陳彬参事官は

『中日大辞典』の出版は愛知大学の関係者の皆様が長期にわたって努力された結果であり、いままで愛知大学が日中友好に力をつくしてきた結果でもあります。今回の増訂版は学術的価値からいうと内容は豊富で、資料は斬新で注釈は正確で、中日両国の言語を学習、研究するうえで極めてすぐれた辞書であります。辞書の活用範囲と影響力は他の専門書よりいっそう広く深いものがあります。同時に『中日大辞典』の価値と意義は学術面にとどまらず更に日中友好と文化交流の橋であり船であると思えます。『中日大辞典』の出版は必ずや駐日両国人民の友好と文化交流をよりいっそう推し進めることでしょう。

と祝辞をのべた。時を違え、国を異にしてはいても『中日大辞典』の原点ともいいうべき「日中友好の船、文化交流の橋」としての役割に対する評価に変わりはない。

『中日大辞典』はこの原点から出発し、日進月歩の中国の発展に応じて、その言語面にあらわれた様相を新版、増訂版、増訂第二版と可能な範囲で正確に反映させるべく努力を重ねてきた。この間、現代中国語の標準的辞典として最も権威ある『現代漢語詞典』が一九九六年修訂された。七八年に初版が出て以来の全面的な改版である。また、最近の国内外における多種多様な中日辞典の出現には実に目を見張るものがある。中日大辞典編纂所³は、これを機に『中日大辞典』の新たな船出をめざし第三版の編集にとり組んでいる。

註

- 1 『中日大辞典 増訂版』(一九八六年)「増訂に際して」による。
- 2 『愛大通信』第2号(一九七三年十一月)による。
- 3 一九九八年一月、処を所と改めた。

〔注〕『愛知大学五十年史 通史編』より抜粋。